

# 旭川北高校の英語の授業

**コミュニケーション能力の育成を目指す授業**  
= 「訳読」のない授業  
= オールイングリッシュの授業

## はじめに

旭川北高校は、平成 17・18 年度の 2 年間にわたり国立教育政策研究所の「教育課程研究指定校事業（外国語）」の指定を受け、「英語 I における指導と評価の研究」をテーマに授業及び評価方法の改善に取り組んできました。

平成 19 年度からは、新たに SELHi の指定を受け、平成 21 年度までの 3 年間、英語 I、英語 II、リーディングの科目において、「教育課程研究指定校事業」での実践を踏まえ、さらに研究を深めていく機会を得ることができました。これを機に、本校がこれまで行ってきた授業実践や評価方法について広く知っていただくとともに、多くの方々からご意見、ご感想をいただき、今後の授業等の改善に活かすため、Web ページ上で紹介することにしました。

### 〈教育課程研究指定校事業における重点研究項目〉

#### ① PLAN に関して

○「実践的コミュニケーション能力」を効果的に育成するためのシラバスの作成

#### ② DO に関して

○オールイングリッシュの授業による指導方法

- ・生徒の学力の伸長に応じた Teacher Talk の研究・運用
- ・生徒の自信を高める手助け (Scaffolding) の研究・運用
- ・学習を促進するフィードバックの研究・運用

○コミュニケーション活動 (pair work, group work) を多く取り入れた指導方法

- ・適切なタスクの開発・運用

#### ③ CHECK に関して

○生徒の実態に即した評価規準の作成、及び「目標に準拠した評価」の客観性、信頼性を高める評価方法の開発・運用

- ・指導と評価の一体化
- ・考査の工夫・改善
- ・paper-and-pencil テストでは測れない学力の評価の工夫・改善
- ・生徒の自己診断、自己評価、及び他者評価の工夫・改善

#### ④ ACTION に関して

- アンケート結果やテスト結果の指導への反映
  - ・ 共通理解を土台にした指導体制の確立
- 研究成果の普及
  - ・ H P の充実
  - ・ 公開授業等の実施

## 1 オールイングリッシュの授業について

はじめから「オールイングリッシュ」ありきではなく、従来、授業の半分近くの時間を占めていた「訳読」中心の授業を見直した結果、必然的に行き着いた授業形態がオールイングリッシュによる授業でした。「訳読」、すなわち、母国語を介して外国語を理解しようとする学習方法では、コミュニケーションの場において速やかに対応できる態度や語学力を育てることは困難であるばかりか、むしろ、大きな妨げとなっ­てはいないか。この疑問が、オールイングリッシュの授業の実施に突き進む原動力となりました。書かれたり、話されている英語を日本語を介さずに理解するためには、分かっている語彙や表現、または、文脈や文法等を手がかりとして意味を推測 (inferring) しながら理解するしかありません。

オールイングリッシュの授業における本文 (教科書の各課) の内容理解は、inferring や、answer-inducing questions (答えを引き出させる質問) を含む Question & Answer を中心に行い、構文等が難解な文章については、教師が簡単な英語を使って言い換えたり、例示したりするなどして、日本語での内容説明をできるだけ行わないよう努めています。語彙、熟語、構文等の習熟については、pair skit、role play、story writing 等の活動を通して、また、表現力の育成については、pair skit、group skit、short speech、presentation 等の活動を通して、それらの定着と向上を図っています。さらに、本文のテーマをもとに、毎回簡単な discussion を取り入れるなど、生徒が英語でコミュニケーションを行う場面を多く設定しています。

事前学習として、Supplementary Handout (予習補助プリント) を生徒に配り、本文中で扱われている idiom や文法事項を自力で予習できるように工夫しています。

また、指導する教員によって、指導内容や指導方法に差が生じないように、Teaching Procedure (教員のための指導用プリント) を作成し、綿密な準備のもと授業を行うようにしています。

平成 19 年度からの SELHi の取組では、研究対象の科目である英語 I (4 単位) において、全クラス (1 学年 6 クラス、男子 85 名、女子 157 名、計 242 名) とともに 40 人のクラスサイズで、日本人教員による Solo Teaching (単独授業) で指導しています。また、ALT との Team Teaching は、少人数クラス編成によるオーラル・コミュニケーション I において実施しています。(オーラル・コミュニケーション I、英語 II の授業についても、現在、オールイングリッシュによる授業を実施しています。)

## 2 評価について

「英語 I」においては、次の4つの観点ごとに、生徒のコミュニケーション活動や能力を把握する視点に立ち、評価規準を設定しています。

### ① 関心・意欲・態度

コミュニケーションに関心を持ち、積極的に言語活動を行い、コミュニケーションを図ろうとしているかどうかについて、次の2つの視点から具体的評価規準を設定する。

#### ア 言語活動への積極的な取組

情報や自分の考えなどを積極的に相手に伝えようとしたり、相手の考えなどを理解しようとしているかどうか、つまり、コミュニケーションに取り組む姿勢を評価する。使用する英語の正確さや適切さ、運用上の能力については評価の対象としない。

#### イ コミュニケーションを継続させようとする態度

理解できないときは、確認したり、繰り返しや説明を求めるなど様々な手立てを用いて、コミュニケーションを継続させようとしているかどうか、その取組の様子や努力を評価する。

### ② 表現の能力

自分の考えや気持ちなどを、誤解を与えることなく相手に伝えることができるかどうかについて、次の2つの視点から具体的評価規準を設定する。

#### ア 正確さ（\*学習の初期段階においてはあまり厳しく問わない）

リズム、イントネーション、文法などの規則に従って正確に表現できているかどうかを評価する。また、情報の内容が間違いなく正確に伝わっているかどうかも評価の対象とする。

#### イ 適切さ

実際のコミュニケーションで誤解なく伝えるために、場面や状況に応じてふさわしい表現を選択したり、適切な声の大きさや速さで話したり、整理して必要な分量を書いたりできているかどうかを評価する。

### ③ 理解の能力

相手の意向や具体的な内容など、相手が伝えようとすることを理解できるかどうかについて、次の2つの視点から具体的評価規準を設定する。

#### ア 正確さ

リズム、イントネーション、文法など言語についての知識を活用して、英語の内容を正しく理解できているかどうかを評価する。

#### イ 適切さ

場面や状況、目的に応じた聞き方や読み方をして英語を理解することができるかどうかを評価する。

### ④ 知識・理解

コミュニケーションを目的とした言語運用の支えになっているかどうかにつ

いて、次の2つの視点から具体的評価規準を設定する。

ア 言語についての知識

正確さの支えとなるリズム、イントネーション、文法など、言葉の持つ仕組みについての知識だけでなく、適切さの支えとなる言語の働きや、場面にふさわしい表現を知っているかどうかなど、言語運用の知識についても評価の対象とする。

イ 文化についての理解

社会に関する知識や百科事典にあるような内容ではなく、言語やその運用の背景として、コミュニケーションに資するものに限って評価する。

「評価は、指導した内容（活動）に関してのみ行うもの」という原則に立ち、英語 I の授業においては、基本的に教科書 2 課ごとに評価の場面を設定しています。（シラバス参照）

学習の実現状況の評価するものなので、評価する前には十分に指導し、練習させることを心がけています。（その場面については、後で紹介する Teaching Procedure Handout 中で触れています。）

### 3 オールイングリッシュの授業での留意点

(1) 授業中、コミュニケーション活動が求められるのは、生徒であって、教員ではありません。すなわち、オールイングリッシュの授業においては、教員の立場からの視点（教員がすべてにおいて英語を使うこと）ではなく、生徒にいかに関与させるかが中心的課題となります。ここで言う「コミュニケーション」の定義は、必ずしも口頭で行う interaction だけではなく、生徒の思考やコミュニケーションに関する姿勢も含むもので、頭の中がコミュニケーションになっている状態、例えば、指名されたとき自分の意見が言える状態もその定義に含むものとしています。これは、40人のクラスサイズにおいて「コミュニケーション授業」を追求する中でたどり着いた本校独自の考えといってもよいかもしれません。

(2) 生徒が積極的にコミュニケーション活動を行うためには、教師の「笑顔(smile)」と「励ましの言葉(positive feedback)」、適切な手助け(scaffolding)、教師と生徒の「親和関係(rapport)」、生徒の「結束力(cohesiveness)、明確な目標をもった学習(goal-oriented study)」等、が不可欠です。

オールイングリッシュの授業を実施する上で、大切なことの一つに、「授業の雰囲気づくり」があげられます。生徒にとって息苦しくない雰囲気、何となく楽しそうな雰囲気、話しやすい雰囲気、失敗を許し合える雰囲気など、結果として授業がうまくいく場合は、そのような雰囲気が教室内に満ちあふれている時です。

さらに、「分かった」「できた」という成就感や達成感を生徒が感じることができるよう活動を毎回の授業の中で取り入れることによって、次の授業に取り組む意欲

や期待感へとつながり、学習の好循環の始まりとなります。

オールイングリッシュの授業を通して、教師の笑顔、生徒への励ましの言葉がいかに重要であるのかを、改めて認識することができました。